

〔論 文〕

殺生行動に影響を与える生活体験と価値観 II

—小学生と中学生での関与の違い—

三浦香苗・石井正子・田中千穂

Influences of Experience in Real Life and Values on “Life-destroying Behavior” II
—Focusing on differences between elementary school children and
junior high school students—

Kanae MIURA, Masako ISHII and Chiho TANAKA

The aim of this paper is to investigate how the real life experiences of elementary school children and junior high school students, and their values concerning life, and their capability to destroy life are involved in their evaluation of life-destroying behavior in a variety of circumstances, and also in their levels of reasoning about life-destroying behaviors.

The subjects were 225 elementary school children and 256 junior high school students. First, we showed them four concrete scenes depicting life-destroying behavior, and had them rate on a scale of 1 to 5 whether they were for or against the behavior. We classified the subjects based on their descriptions of their reasoning into levels of reasoning concerning life-destroying behavior. Next, using their answers to the multiple-choice questions on their experiences in real life, their value systems concerning life, and their life-destroying capabilities, we formulated a subscale, using factor analysis, and investigated the relationships with the levels of reasoning.

As the results of analysis of variance, it was found that subjects' experiences in real life, their value systems concerning life, and the capability to destroy life were unlikely to act as influential dependent variables that define the subjects' levels of reasoning.

The results of multiple regression analyses showed a difference between elementary school pupils and junior high school students in the factors that influenced their approval-disapproval of life-destroying behaviors.

Key words: *life-destroying behavior* (殺生行動), *levels of reasoning* (理由水準), *approval-disapproval of life-destroying behaviors* (殺生行動の賛否), *experience in actual life* (生活体験), *value system concerning life* (価値観), *life-destroying capabilities* (殺生行動可能性), *elementary school children and junior high school students* (小・中学生)

筆者らは、今まで殺生行動に関して幾つかの異なる観点から研究を進めてきた。1つは、どのような対象・目的の殺生が可能であるかという研究である。その結果、小学生では草花・昆虫・魚介類という我々人間とは類似性を感じにくい存在であれば殺生が可能であるが、大きな樹木や犬猫といった大きなあるいは類似性を感じやすい対象に関してはその殺生に

抵抗を感じるということが明らかになった(石井・三浦 2007, 三浦・石井・長谷川 2005)。それらの殺生行動は、「嗜虐のための殺生」、「目的の明確な殺生」、「快適性維持のための殺生」、「魚介類の殺生」と区分することができることも明らかになった(石井・三浦 2008)。また、殺生行動の賛否を左右する理由を尋ねたところ、「感情的」、「人間中心」、「生命尊

重」など7段階の理由水準に分けることが可能で、個々の殺生行動の賛否は理由水準によって異なる傾向があること、個人によって優位な理由水準が異なることが明らかになった（長谷川・三浦・石井 2005）。そこで、これらの優位な理由水準からタイプを抽出した。予想されたことではあるが、小学生・中学生・大学生・教員と年齢が上昇すればタイプはより高度のものが多く出現するようになるが（三浦・石井・長谷川 2005）、小・中学生では、「人間中心型」や「生命尊重の上での人間中心型」は意外と少なく、「生命尊重型」・「葛藤型」・「譲歩型」が多いことが明らかになった（三浦・田中・石井 2007）。

さらに、殺生行動の可能性（殺生行動を行えるかどうか）にそれ以前の経験や価値観がどう影響を与えるかも見た（石井・三浦 2008）。それによると、小学生では、殺生する対象によって、生活体験や価値観が与える影響は異なり、「ペットの飼育体験」は「身近な生き物」や「野生小動物」の殺生を抑制する機能を持ち、「自然体験」は「殺生意識の希薄な」あるいは「水辺の生き物」の殺生を促進する機能を持つことが明らかにされた。また、「暴力肯定・高齢者排除」の考えは、すべての殺生を促進する機能を持っていた。中学生においては、「自然体験」は、「殺生意識の希薄な」場合や「嗜虐的」な殺生に、また「残虐なゲーム体験」は、「目的のある殺生」や「嗜虐的殺生」に促進的な効果を持つが、むしろ体験自体よりも、どのような価値観を有しているかがより大きな効果を持っていた。すなわち、「暴力肯定・高齢者排除」は4種の殺生すべてに、「体罰否定」は、「殺生意識希薄な」場合や「嗜虐的」な殺生を抑制する機能を、「危険許容」は促進する効果を持っていたというように、経験よりも価値観によって多く説明された。

本研究においては、石井・三浦（2008）の研究の発展として、生活体験・価値観・殺生行動可能性が小・中学生の殺生に関する理由水準のタイプによっていかに異なるか、また、殺生に関わる賛否にいかに関わっているかを明らかにする。

予想としては、以下の2つである。

1) タイプによって生活体験・価値観・殺生行動

可能性の各下位尺度得点は異なる。

2) 殺生に関する賛否には、小学生では、生活経験がより多く影響を与えるが、中学生になると生活体験よりも価値観が大きく影響を与える。

方 法

1 被験者: 小学5年生 225名と中学1年生 256名。千葉市内の公立小学校3校および中学校3校から各2学級合計6学級である。これらの学校は、旧市街地、住宅地、郊外の新興住宅地から1校ずつ選んだ。なお、これらの被験者は、昨年度、石井・三浦（2008）報告のものと同一である。

2 調査時期: 2005年3月

3 調査内容: 石井・三浦（2008）と重複する部分は、簡潔に記述する。

1) 具体的4殺生場面での殺生行動への5段階評定での賛否とその理由の自由記述

①「住宅地に出没する熊の銃殺」、②「小学生の体験学習でひよこの時から飼育したニワトリを食べる」、③「日当たりを良くするため樹齢100年以上の大木の伐採」、④「ウサギや山鳥の狩猟」について、賛否を、（賛成（1）・やや賛成（2）・どちらでもない（3）・やや反対（4）・反対（5））の5段階評定で求めた。また、そう考えた理由を自由記述で求めた。この部分に関連する分析はすでに三浦・石井・長谷川（2005）、三浦・田中・石井（2007）で報告されているので、参照されたい。

2) 「生活体験」に関する質問

中学生向けには「あなたの小学校時代を思い出してください。小学生時代の自分の経験に最も近いところに○を付けてください。」とし、小学生向けには「小学生のあなたが今までしてきたことについて答えてください。」とし、22項目について、「あてはまる（5）、ややあてはまる（4）、どちらでもない（3）、あまりあてはまらない（2）、あてはまらない（1）」の5段階評定を求めた。具体的項目およびその因子分析結果については、石井・三浦（2008）を参照されたい。

3) 「殺生行動可能性」に関する質問

具体的な殺生行動ができるかどうかを見るために、

「あなたは、次のようなことができますと思いますか。あてはまると思うところに○をつけてください。ここに書かれた動物や植物はすべて生きているものです。そういう事をするのが、良いか悪いかには関係なく、あなたができると思うかどうかだけを考えて答えて下さい。」と述べた後、三浦ほか（2004，2006）で成人に使用した 21 項目と同じ項目について、「できる（5），たぶんできる（4），できるかどうかわからない（3），たぶんできない（2），できない（1）」の 5 段階評定で求めた。具体的項目の内容と提示順序は、後述する表 2 に示す。

4) 「価値観」に関する質問

「次の文を読んで、自分の考え方や行動に一番近いと思うところの数字に○を付けてください」とし、18 項目について、「あてはまる（5），ややあてはまる（4），どちらでもない（3），あまりあてはまらない（2），あてはまらない（1）」の 5 段階評定を求めた。これらの項目は、三浦・石井・田中（2006）の研究で使用した尺度を基にわかりやすい表現にし、小・中学生では回答が困難と思われるいくつかの項目を削除し、代替の質問を挿入して使用したものである。具体的項目の内容と提示順序は、石井・三浦（2008）を参照されたい。

結 果

1 タイプの小・中学生別分布

具体的殺生場面で自由記述された理由は、三浦・石井・長谷川（2005）に基づいて、無記入（0），感情的反応（1），人間中心（2），生命維持の尊重（3），生命維持の上での人間中心（4），葛藤（5），譲歩（6），統合（7）の 8 水準に分類した。各場面別・小中学生別の水準の分布などは、三浦・田中・石井（2007）に記載されているので、参照されたい。さらに三浦・田中・石井（2007）の判定基準によって、各個人がどの水準を多く用いたかによって、8 タイプに類別した。表 1 にタイプの校種・性別の分布を示した。

全体では、タイプ 3（T3: 生命尊重型）: 30.9%，タイプ 5（T5: 葛藤型）: 20.8%，タイプ 6（T6: 譲歩型）: 18.8% が 10% 以上の出現率のタイプである。小学

表 1 タイプ別群別分布率と殺生賛否得点

		T0	T1	T2	T3	T4	T5	T6	T7
小学生	N	3	16	17	90	6	51	45	1
	%	1.3	7.0	7.4	39.3	2.6	22.3	19.7	0.4
中学生	N	34	24	26	60	12	50	46	4
	%	13.3	9.4	10.2	23.4	4.7	19.5	18.0	1.6
男 子	N	22	20	20	73	7	42	45	1
	%	9.6	8.7	8.7	31.7	3.0	18.3	19.6	0.4
女 子	N	15	20	23	77	11	59	46	4
	%	5.9	8.7	9.0	30.2	4.3	23.1	18.0	1.6
合 計	N	37	40	43	150	18	101	91	5
	%	7.6	8.2	8.9	30.9	3.7	20.8	18.8	1.0
賛否得点		3.91	4.04	3.42	4.32	4.06	4.23	4.22	3.90

生では、タイプ 3: 39.3%，タイプ 5: 22.3%，タイプ 6: 19.7% の出現率が高く、タイプ 0（T0: 無記入型）: 1.3% とタイプ 7（T7: 統合型）: 0.4% の出現率が低い。中学生でも、タイプ 3: 23.4%，タイプ 5: 19.5%，タイプ 6: 18.0% と小学生と同一の順序で多く、続いてタイプ 0: 13.3% が多い。タイプ 7 は 1.6% と低いが、小学生群よりも出現率は高い。

性別のタイプの分布の差異を見ると、男子ではタイプ 3: 31.7%，タイプ 6: 19.6%，タイプ 5: 18.3%，タイプ 0: 9.6% であるのに、女子ではタイプ 3: 30.2%，タイプ 5: 23.1%，タイプ 6: 18.0%，タイプ 0: 5.9% と出現頻度は若干異なるが、大きな差異ではない。

2 タイプ別の殺生の賛否の差異

すでに三浦・田中・石井（2007）に記したので詳しい資料は省略するが、小・中学生の具体的 4 場面での賛否率は、場面によって異なり、全被験者を対象にした場合は、場面 1 の「住宅地に出没する熊の銃殺」が「やや反対」の 4 点以下であり、他の 3 場面は 4 以上の値である。最も高いのは場面 4 の「ウサギや山鳥の狩猟」であった。4 場面とも小学生の反対傾向が強かった。タイプ別に 4 場面の平均によって求めた賛否率も表 1 に示したが、タイプによって賛否の値は異なり、無記入型の T0，人間中心型の T2，統合型の T7 は 4 点以下で、特にタイプ 2 の人間中心型が最も低く、殺生に相対的に賛成である。反対に最も値が高いのは、生命尊重型の T3 である。理由水準の型から当然と思われる結果である。

3 殺生行動可能性尺度の作成

本論文の目的である小・中学生の殺生の賛否とその理由水準のタイプに、生活体験・価値観・殺生行動可能性がいかに関わっているかを明らかにするためには、賛否得点および理由水準のタイプを独立変数、生活体験・価値観・殺生行動可能性を従属変数とする分析を行う必要がある。また、従属変数の効果が小・中学生によっていかに異なるかをみるためには、小・中学生に共通の尺度を用いなければならない。

ところで、前論文（石井・三浦，2008）において明らかのように、「生活体験」に関しては、小・中学生別に因子分析を行った結果、「自然体験」、「残虐なゲームやマンガ体験」、「身近な死の体験」、「ペットの飼育体験」、「集団遊び体験」という共通な5下位尺度が抽出された。また、「価値観」に関しても同様な手続きで「他者への関与」、「暴力肯定・高齢者排除」、「体罰否定」、「危険許容」、「清潔重視」という共通な5下位尺度が抽出できた。

ところが「殺生行動可能性」に関しては、小学生

では「身近な生き物の殺生」、「殺生意識が希薄な殺生」、「水辺の生き物の殺生」、「野生小動物の殺生」、「快適性維持のための殺生」の5下位因子尺度が抽出され、中学生では「目的のある殺生」、「殺生意識が希薄な殺生」、「嗜虐的殺生」、「快適性維持のための殺生」の4下位因子尺度が抽出され、小・中学生によって下位因子尺度の数および各下位因子尺度の特徴が異なるという結果になった。そこで、「殺生行動」に関しては、小・中学生によって因子構造が異なるのを承知の上で、両群を合わせた分析を行った。因子分析の結果は、表2に示すが、第4因子までで全体の50.1%を説明する。

第1因子は、「転居のためにペットの猫を殺生」、「食べるためにニワトリを殺生」、「理科の実験のために犬を解剖」などからなり、中学生のみを対象にした結果の「目的のある殺生」と項目が重なるので「目的殺生」と命名した。第2因子は、「ハエをはえ叩きで潰す」、「クモを新聞紙で叩き殺す」、「風通しをよくするために木の枝を切る」、「部屋に活けるために花壇の花を切る」などからなり、小・中学生

表2 殺生行動可能性項目因子分析結果

質 問 項 目	平均(SD)	因 子			
		I	II	III	IV
2. ひっこしで餓えなくなったので、ペットの猫を殺す	1.16(.61)	.86	-.10	.02	-.13
3. 飼っていたニワトリの首を食べるために絞めて殺す	1.31(.81)	.76	-.03	-.04	.13
15. 理科の勉強で、犬の解剖をする	1.29(.81)	.72	-.08	-.11	.19
21. 近所から鳴き声がうるさいと言われたので飼っていたオンドリを殺す	1.32(.79)	.69	.03	.19	-.16
11. 面白いのでカブトムシのお腹にナイフを突き刺す	1.29(.79)	.55	-.12	.42	-.05
4. 雨戸が閉められないのでスズメの巣を壊す	2.05(1.20)	.50	.48	-.23	.04
18. ハエをはえたたきで潰す	3.94(1.42)	-.15	.70	.07	.05
12. 部屋の中に入ってきたクモを新聞紙でたたき殺す	3.24(1.59)	-.40	.65	.12	-.14
9. 風通しをよくするために、木の枝を切る	2.93(1.43)	.00	.50	-.03	-.01
13. 部屋に活けるために花壇の花を切る	3.19(1.52)	-.01	.50	-.12	.24
16. カラスの数がふえないように雛のいる巣を壊す	2.08(1.23)	.35	.48	.12	.16
17. 生きている貝でみそ汁を作る	3.21(1.54)	-.06	.36	-.05	.35
10. 飛んできたセミを火の中に投げ入れる	1.65(1.18)	.22	-.07	.90	-.39
19. ねずみ捕りにかかったネズミを水に沈める	1.92(1.96)	.10	.17	.55	.11
20. 面白いので、カタツムリを踏みつぶす	1.59(1.08)	.23	-.01	.52	.07
5. コオロギの足をもいで歩けなくする	1.78(1.26)	.09	-.01	.52	.20
6. 突然に道に出てきた蛇を棒で叩いて殺す	2.17(1.38)	.01	.22	.40	.18
7. 縮まるのが面白いので、ナメクジに塩をかける	2.96(1.57)	-.21	.30	.37	.28
14. ザリガニのえさにするために、カエルを殺す	1.74(1.15)	.28	.06	.28	.23
1. 理科の実験のためにフナを解剖する	2.51(1.49)	.15	-.08	.30	.69
8. 食べるために、釣ってきた魚をさばく	2.82(1.53)	.29	.11	.02	.63

両群に共通な「快適性維持のための殺生」と項目が重なるので、「快適性目的の殺生」と命名した。第3因子は、「セミを火の中に投げ入れる」、「ネズミを水に沈める」、「カタツムリを踏み潰す」、「コオロギの足をもいで歩けなくする」などの項目からなり、中学生群の「嗜虐的殺生」と項目が重なるので、「快楽的殺生」と命名した。第4因子に因子付加量が大きい項目は、「理科の勉強のためにフナをばらばらにして調べる」、「食べるために釣ってきた魚をさばく」で、小学生群の「水辺の生き物の殺生」、中学生群の「殺生意識の希薄な殺生」を構成するものである。「魚の殺生」と命名した。

当該因子への因子付加量が.48以上、他因子への因子付加量が.40未満の基準で項目を選択し、各下位因子尺度を構成した。第1下位因子尺度である

「目的的殺生」は4項目からなり、 α 係数は.847であった。第2下位因子尺度の「快適性目的の殺生」は5項目からなり、 α 係数は.719である。第3下位因子尺度の「快楽的殺生」は4項目からなり、 α 係数は.816であった。第4下位因子尺度の「魚の殺生」は2項目からなり、 α 係数は.697である。

4 タイプ別生活体験・殺生行動可能性・価値観の相違

上記2で述べたタイプによって、生活体験・殺生行動可能性・価値観の各下位尺度に差があるかどうかを見た結果が表3である。分析は、タイプを独立変数、各下位尺度を従属変数とする分散分析を行い、分散分析に有意な差が見られた場合には、下位検定としてDunnettの t 検定を行った。

表3 タイプ別各因子尺度下位尺度平均と分散分析結果

	人数	生 活 体 験					殺 生 行 動			
		自然体験	残虐なゲームやマンガ体験	身近な死の体験	ペットの飼育体験	集団遊び体験	目的的殺生	快適性維持のための殺生	快楽的殺生	魚の殺生
全 体	480	2.88(.87)	2.73(1.26)	3.46(1.39)	3.66(1.29)	3.72(0.94)	1.28(0.64)	3.33(1.07)	1.74(0.96)	2.68(1.32)
T0	37	2.85(1.01)	2.78(1.47)	3.67(1.52)	3.74(1.34)	3.74(1.11)	1.46(0.79)	3.41(1.06)	2.05(1.67)	2.82(1.36)
T1	39	2.94(0.90)	3.08(1.42)	3.43(1.35)	3.69(1.29)	3.49(1.01)	1.47(0.97)	3.31(0.97)	2.11(1.19)	2.37(1.12)
T2	43	2.82(0.80)	3.04(1.33)	3.46(1.29)	3.50(1.26)	3.83(0.82)	1.47(0.86)	3.67(1.10)	2.04(1.11)	3.03(1.42)
T3	149	2.81(0.86)	2.74(1.17)	3.47(1.37)	3.67(1.26)	3.83(0.82)	1.23(0.60)	3.26(1.15)	1.68(0.95)	2.54(1.31)
T4	18	2.83(1.10)	3.11(1.28)	3.37(1.48)	4.33(0.89)	3.42(1.11)	1.24(0.62)	3.25(1.09)	1.64(0.90)	2.64(1.32)
T5	101	2.91(0.81)	2.42(1.22)	3.48(1.33)	3.70(1.36)	3.73(0.92)	1.18(0.43)	3.33(1.06)	1.51(0.74)	2.59(1.33)
T6	91	2.97(0.91)	2.61(1.19)	3.40(1.49)	3.64(1.33)	3.64(0.98)	1.22(0.51)	3.30(0.99)	1.70(0.92)	2.90(1.32)
T7	5	3.11(0.65)	3.40(1.36)	3.40(2.20)	3.40(1.48)	3.60(0.96)	1.35(0.65)	3.20(1.14)	1.45(0.62)	3.10(1.60)
分散分析 F 値		0.41	2.27	0.15	0.95	1.07	2.06	0.78	3.08	1.52
有 意 確 率		.90	.03	.99	.47	.38	.05	.61	.01	.16

	価 値 観				
	他者への関与	暴力肯定・高齢者排除	体罰否定	危険許容	清潔重視
全 体	4.06(0.81)	2.72(0.74)	3.11(1.02)	3.16(0.99)	3.48(1.15)
T0	3.87(0.97)	2.89(0.89)	3.11(1.06)	3.24(0.90)	3.62(0.99)
T1	3.94(1.04)	2.96(0.62)	3.17(1.03)	2.86(1.12)	3.49(1.21)
T2	4.00(0.85)	2.87(0.86)	3.21(1.15)	3.41(0.91)	3.72(1.26)
T3	4.16(0.78)	2.70(0.75)	2.98(0.98)	3.12(1.01)	3.48(1.13)
T4	3.91(0.84)	2.81(0.77)	3.13(1.27)	3.39(0.85)	3.62(1.19)
T5	4.11(0.68)	2.51(0.67)	3.25(0.97)	3.04(0.94)	3.47(1.20)
T6	4.00(0.80)	2.74(0.69)	3.03(0.99)	3.27(1.00)	3.26(1.12)
T7	4.53(0.65)	2.70(0.96)	3.73(0.89)	3.53(1.07)	3.60(1.19)
分散分析 F 値	1.20	2.25	1.05	1.61	0.84
有 意 確 率	.30	.03	.39	.13	.55

有意な差が見られたのは、「生活体験」の第2下位尺度である「残虐なゲームやマンガ体験」(F値, 2.27 $p=.03$), 「殺生行動可能性」の第1下位尺度である「目的的殺生」(F値 2.06, $p=.05$), 第3下位尺度の「快楽的殺生」(F値 3.08, $p=.01$), 「価値観」の第2下位尺度である「暴力肯定・高齢者排除」(F値 2.25, $p=.03$) の4下位尺度のみであった。14下位尺度中4下位尺度のみに差が見られた。

また, 下位検定で有意差が見られたものは, 「価値観」の第2下位尺度である「暴力肯定・高齢者排除」でT1の「感情型」(平均値 2.96)とT5の「葛藤型」(平均値 2.51)の間でのみであった。

生活体験・価値観・殺生行動可能性は, タイプにはあまり関係しないといえよう。

5 殺生行動の賛否得点への生活体験・殺生行動可能性・価値観の寄与

4つの具体的場面での殺生行動および4場面平均の賛否得点を従属変数, 生活体験・殺生行動可能性・価値観の各下位尺度を独立変数とした重回帰分析を小・中学生別に行った。結果を表4に示すが, 各下位尺度の数値は標準偏回帰係数である。

4場面平均でみた場合, 小学生ではR2乗は.105と低くて有意ではなく, 各場面の賛否得点との重回

表4 殺生賛否得点の重回帰分析結果

		4 場面平均				住宅地の熊の銃殺				飼育した鶏の食肉			
		小学生		中学生		小学生		中学生		小学生		中学生	
R2 乗		.105	有意性	.307	有意性	.170	有意性	.135	有意性	.151	有意性	.134	有意性
有意性		.152		.000		.004		.005		.013		.005	
生活体験	自然体験	-.145	.083	.042		-.008		.094		.048		.080	
	ゲームや漫画体験	-.046		-.036		.083		-.028		.032		-.060	
	身近な死の体験	-.019		.002		-.038		.050		-.018		-.049	
	ペットの飼育体験	-.230		.012		.009		-.044		.021		.110	
	集団遊び体験	-.001		-.024		.144	.050	-.048		-.011		.019	
可殺生性行動	目的的殺生	-.008		-.497	.000	-.117	.093	-.181	.035	-.287	.003	-.301	.000
	快適性目的の殺生	.135		-.118		-.142		-.010		-.135		-.147	.076
	快楽的殺生	-.132		.056		-.090		-.191	.055	-.088		.172	.084
	魚の殺生	-.006		-.007		-.070		.000		.113		.020	
価値観	他者への関与	.130		.109	.078	-.012		.019		.137	.082	.086	
	暴力肯定・高齢者排除	-.005		.012		-.100		.026		.126		-.038	
	体罰否定	-.008		.073		.037		.035		.109		-.013	
	危険許容	.013		.086		-.107		.097		.015		-.072	
	清潔重視	-.005		-.109		-.117		-.123	.085	.000		.052	

		大木の伐採				ウサギや山鳥の狩猟			
		小学生		中学生		小学生		中学生	
R2 乗		.134	有意性	.142	有意性	.216	有意性	.238	有意性
有意性		.034		.003		.000		.000	
生活体験	自然体験	.071		-.024		-.066		-.077	
	ゲームや漫画体験	.111		-.011		.027		.022	
	身近な死の体験	-.025		.032		-.102		-.034	
	ペットの飼育体験	.060		-.064		.061		.023	
	集団遊び体験	.075		-.056		.022		.034	
可殺生性行動	目的的殺生	-.231	.016	-.322	.000	-.349	.000	-.473	.000
	快適性目的の殺生	-.069		-.143		-.093		.021	
	快楽的殺生	.030		.059		-.082		.125	
	魚の殺生	-.091		.052		.067		-.056	
価値観	他者への関与	-.089		.121	.078	.111		.044	.080
	暴力肯定・高齢者排除	-.005		.097		.001		-.064	
	体罰否定	.092		.065		.089		.114	
	危険許容	-.126		.117		-.003		.085	
	清潔重視	-.049		-.118		-.063		-.091	

帰分析の R² 乗よりも小さい。これに対し、中学生では 4 場面平均の R² 乗は .307 と高い。このことは小学生の方が、場面によって賛否を規定する独立変数が異なることを示し、中学生では 4 場面に共通な下位尺度によって説明されることを示唆する。

場面別に見てみると、小学生では、場面 1 の「住宅地に出没する熊の射殺」では、生活体験尺度の第 5 下位尺度である「集団遊び体験」のみが .144 と有意な回帰係数で、殺生行動可能性尺度の第 2 下位尺度の「快適性目的の殺生」は有意傾向でしかないが -.142 とマイナスの回帰を示す。場面 2 の「ひよこの時から飼育したニワトリを食べる」では、殺生行動可能性尺度の第 1 下位尺度の「目的的殺生」が -.287、第 2 下位尺度の「快適性目的の殺生」が -.135 ($p=.115$) とマイナスの回帰係数で、価値観尺度第 1 下位尺度の「他者への関与」は .137 とプラスの回帰係数を示す。第 3 場面である「大木の伐採」では、殺生行動可能性尺度の「目的的殺生」のみが -.231 と有意な回帰を示す。場面 4 の「ウサギや山鳥の狩猟」では「目的的殺生」のみが -.349 と有意な変数となっている。その結果、4 場面合計の賛否では、R² 乗の値は低くなり、個々の場面では有意とはならなかった生活体験尺度の第 4 下位尺度の「ペットの飼育体験」が -.230、第 1 下位尺度の「自然体験」が -.145 と、有意あるいは有意傾向の回帰変数として出現する。

中学生の場合、場面 1 の「住宅地に出没する熊の射殺」では、殺生行動可能性尺度の第 3 下位尺度の「快楽的殺生」が -.191、「目的的殺生」が -.181 と有意な回帰係数を示す。場面 2 の「ひよこの時から飼育したニワトリを食べる」では、殺生行動可能性尺度の第 1 下位尺度である「目的的殺生」が -.301「快楽的殺生」が .172 と比較的高い回帰係数を示す。また、場面 3 の「大木の伐採」では「目的的殺生」のみが -.322、さらに場面 4 の「ウサギや山鳥の狩猟」でも「目的的殺生」が -.473 と有意な回帰を持つ変数であった。4 場面を合計したものでは、「目的的殺生」が -.497 と有意な回帰変数となっている。4 場面のすべてに有意な回帰変数として「目的的殺生」があったために、合計でも「目的的殺生」

が有意な回帰となり、R² 乗も有意であった。

全体的考察と今後の課題

200 名を超える小・中学生に、4 つの具体的殺生場面への賛否とその理由を尋ね、同時に多肢選択法で、生活体験・殺生行動可能性・価値観を尋ねた。殺生に関する優位な理由水準から被験者をタイプに分け、このタイプおよび賛否を規定する変数を、分散分析および重回帰分析で求めた。主要な結果は以下のとおりである。

- 1) タイプを独立変数とする分散分析の結果、有意な差が見られたのは、生活体験の 5 下位尺度のうち「残虐なゲームやマンガ体験」、殺生行動可能性の 4 下位尺度中「目的的殺生」と「快楽的殺生」の 2 尺度、価値観の 5 下位尺度のうち「暴力肯定・高齢者排除」のみであった。タイプを規定する有力な変数として生活体験・殺生行動可能性・価値観は考えにくいことが示唆された。
- 2) 殺生行動への賛否に生活体験・殺生行動可能性・価値観がどのような影響を与えているかをみたところ、影響の仕方は小学生と中学生では異なっていた。小学生では場面によって、影響を与える変数は異なるが、中学生では、4 場面に共通な変数が影響を与えていた。
- 3) 4 場面を合計して算出されると考えられる一般的な殺生への賛否には、小学生では生活体験の「ペットの飼育経験」が否定的見解への影響を、中学生では「目的的殺生」が否定的見解に関与していた。殺生への賛否の態度に与える変数が小学生と中学生では異なることは興味深い。

今後の課題としては、まず第 1 に具体的場面の妥当性の検討である。筆者らは、具体的文脈であるかによって、そこで行われる殺生への賛否もその理由も異なると考え、性質の異なる 4 場面を作成し、そこでの殺生への賛否とその理由から子どもたちの認識の構造を把握しようとした。この筆者らの試みは場面によって殺生行動の賛否に影響する変数が異な

ることから支持されたと考えることはできるが、同時にそれは各場面で記述された理由から理由水準を推定し、さらには優位なタイプを確定することができたと確信することを難しくしている。このことが、タイプによって、影響を受ける生活体験も殺生行動可能性も価値観が異なるという結果にならなかったことを説明するかもしれない。つまり、種類の異なる4つの具体的場面を設定したことが、調査対象者の認識水準や特性を把握させることを困難にさせている可能性がある。今後は、多様な具体的場면을提示し、それらの特徴わけから、タイプを再検討することが必要であろう。三浦・田中・石井（2008）で用いた新課題設定によって、検討していきたい。

前論文（石井・三浦 2008）と今回の分析で、生活体験の持つ意味が小学生と中学生では異なることが示唆された。つまり、小学生では、生活体験が殺生行動の賛否にも殺生行動可能性にも大きく影響するが、中学生では生活体験以外に価値観が影響を持つことが示された。また、殺生行動の認識水準には、生活体験・殺生行動可能性・価値観がそれほど強力に働いていないことも示唆された。では、どのような変数がこれらに影響を与えているのであろうか。知的能力・感受性などが容易に思いつくものであるが、これらの変数をどう我々の枠組みの中に取り入れていくべきであらうか。

最後になるが、この調査を行っていて気になっていたことであるが、小・中学生あるいは大学生が殺生を行うことに否定的であることが気になる。現実社会の中では、もっと安易に殺生は行われているし、人間が生きていくためには殺生することは必要なことである。必要な殺生と過度の快適性を求めて行う殺生との区分けを考えさせることが必要と考える。

参考・引用文献

石井正子・三浦香苗（2007）殺生行動に関する認識の発達Ⅱ—殺生行動項目の因子分析を通して—学苑 796号 人間社会学部紀要 昭和女子大学 pp. 78-89
石井正子・三浦香苗（2008）殺生行動に影響を与える生活体験と価値観—小学生と中学生での関与の違い—学苑 808号 人間社会学部紀要 昭和女子大学 pp. 62-

73

長谷川千穂・三浦香苗・石井正子（2005）「いのち」に関わる意識と生活体験 5—具体的殺生行動に対する意識の分析—日本教育心理学会 第47回総会発表論文集 p. 575
三浦香苗・石井正子・長谷川千穂（2005）大学生の「具体的殺生行動」に対する認識構造の分析—「殺生行動」に対する賛否判断理由の水準分け—学苑 772号 人間社会学部紀要 昭和女子大学 pp. 33-40
三浦香苗・石井正子・田中千穂（2006）学生・教員の殺生行動に関する認識構造を規定する要因—生活体験・価値観・殺生可能性は殺生への態度に影響を与えるか—学苑 784号 人間社会学部紀要 昭和女子大学 pp. 19-39
三浦香苗・石井正子・田中千穂（2008）「いのち」に関わる意識と生活体験 11—小・中学生における殺生意識水準のタイプと殺生行動・生活体験・価値観の関連—日本教育心理学会 第50回総会発表論文集 p. 706
三浦香苗・長澤陽平・石井正子（2004）大学生向け殺生行動尺度の作成の試み—子ども時代の生活体験の効果の分析を通して—学苑 761号 人間社会学部紀要 昭和女子大学 pp. 27-39
三浦香苗・田中千穂・石井正子（2007）殺生行動に関する認識の発達Ⅰ—具体的殺生場面への賛否と判断理由の分析—学苑 796号 人間社会学部紀要 昭和女子大学 pp. 67-77
三浦香苗・田中千穂・石井正子（2008）殺生行動に関する認識の発達Ⅲ—新課題設定による殺生行動にかかわる認識水準の再検討—学苑 808号 人間社会学部紀要 昭和女子大学 pp. 74-86
田中千穂・三浦香苗・石井正子（2006）「いのち」に関わる意識と生活体験 8—具体的殺生行動に対する意識の分析—日本教育心理学会 第48回総会発表論文集 p. 736

（みうら かなえ 心理学科）

（いしい まさこ 初等教育学科）

（たなか ちほ 武蔵大学学生相談室）